

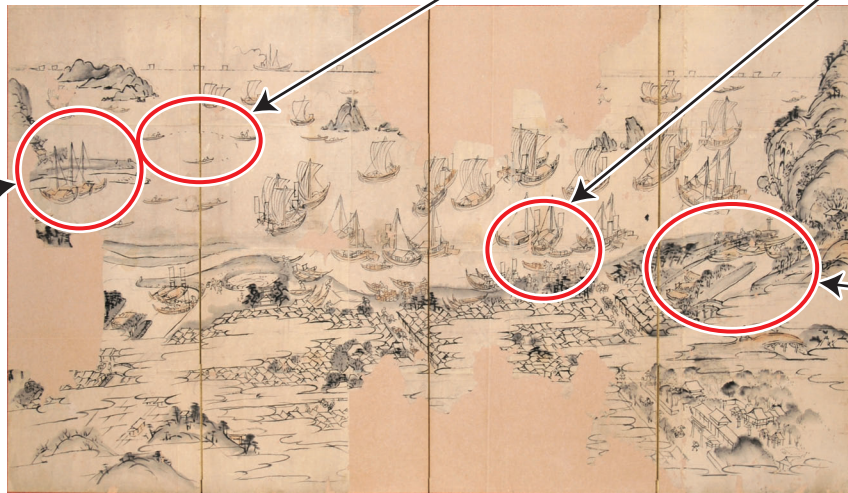
学校名() ()年()組 名前()

梧陵のふるさと (第1章)

東側から湯浅の町や湯浅湾を描いています。沖にはたくさんの帆船が停泊し、浜には小船が並び、樽らしきものを乗せて浜に向かう()が見えます。
〔展示番号3参照〕

鰯網漁の様子です。広村では、遠く()や()まで出漁することもありました。
〔展示番号6参照〕

湯浅の浜で、小船に特産の()が入った樽を積み込んでいます。小船が沖合に停泊している帆船に近づき、樽を積み替えています。
〔展示番号3参照〕



広村にあった「大波戸」と呼ばれた船着き場です。紀伊藩初代藩主の()が築いたといわれています。
〔展示番号8~10参照〕

山田川河口にある()に小船が停泊し、荷物の積み下ろしをしています。石積み護岸には、現在も蔵が建ち並んでいます。
〔展示番号3参照〕

明治時代の湯浅・広の風景をみてみよう。
〔展示番号3〕

祖父・灌圃と周辺の人々 (第2章)

1875年に行われた広八幡神社の祭礼行列を描いています。広八幡神社では、江戸時代から毎年8月15日に祭礼が行われ、神社での神事のあと、神社から浜に渡御行列が行われました。最後尾では、白装束の人が()を担いでいます。
〔展示番号15参照〕

右手にうけ棒、左手に鉾をもつ鼻高面をかぶった人がみえます。広八幡神社には、1589年に灌圃の先祖である()という人が作った鼻高面が残されています。1824年にその鼻高面を灌圃と矩美の2人が修理をしています。
〔展示番号19参照〕



行列が出発する場所で、()の幟がみえます。その奥にある男山では、江戸時代終わりから明治時代の初めにかけてやきものが焼かれました。職人の1人に、印南町出身の()がいました。
〔展示番号15・42参照〕

行列には、楽器を演奏する人も参加しています。梧陵の祖父である灌圃は、()という管楽器を担当していました。この絵にもその楽器を演奏する人が描かれています。
〔展示番号15~17参照〕

行列は浜にある()に向かっていきます。そこには湯をわかつ釜がおかれています。到着した行列の人々は、わかつ釜のお湯に笹を浸し、身にふりかけて、神に祈る神事を行いました。
〔展示番号15参照〕

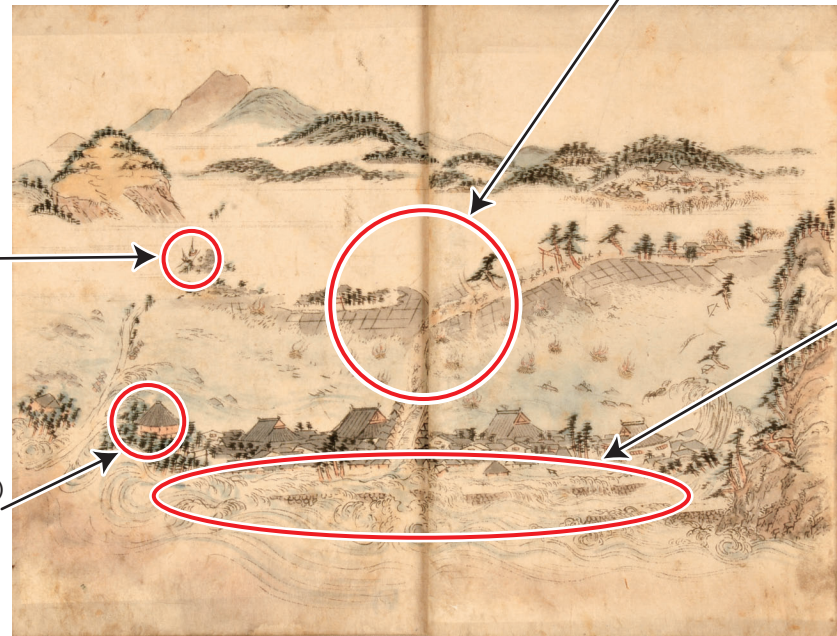
広八幡神社で行われた渡御行列の様子をみてみよう。
〔展示番号15〕

安政地震津波と梧陵・咏処 (第3章)

広村を襲った1854年の大津波の様子を描いています。描いたのは、広川町出身で、千葉県銚子市で醤油醸造業を営んでいた()という人です。
〔展示番号24参照〕

広川の上流に2隻の()がみえます。おそらく、広川をさかのぼった津波が運んだとみられます。

『安政聞録』が残されている()という寺です。
〔展示番号24参照〕



広村を襲った安政の大津波の様子をみてみよう。
〔展示番号24〕

襲ってきた津波から、高台にある()に逃げる人々の姿がみえます。道の両側の田では、刈り取った()に火がつけられています。この道は、毎年行われる渡御行列の道でもありました。

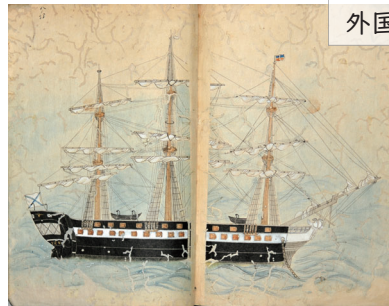
津波が、室町時代に畠山氏が築造したといわれる()を越えて、家や田が海水に浸かっています。津波から4年後に梧陵によって()が築かれました。
〔展示番号6・7参照〕

幕末・維新时期における梧陵と海荘 (第4章)

1853年にアメリカ東インド艦隊司令長官の()が、4隻の軍艦を率いて神奈川県横須賀市の浦賀沖に現れ、6日後に横須賀市のくりはま久里浜に上陸する様子を描いています。
〔展示番号32参照〕

右に見える2隻の巨大な船は、アメリカの船です。その色から()と呼ばれていました。一方、左にみえるたくさんの小さな船は日本の船です。この事件が起こったとき、梧陵は()にいました。
〔展示番号32参照〕

19世紀中ごろに日本にやってきた外国船の様子をみてみよう



この船は、1854年に和歌山の日高沖に現れた()のディアナ号です。驚いた紀伊藩は、海岸防備を村役人や地主に命じ、梧陵も海岸の固場に詰めています。
〔展示番号33参照〕

